

水稲 ヒメトビウンカと縞葉枯病について



図1 ヒメトビウンカ（左：雄成虫、中：雌成虫、右：幼虫）



図2 縞葉枯病（左：ゆうれい症状、中：葉の病斑、右：穂の出すくみ）

1 生態

ヒメトビウンカ（成虫の体長は2.1～2.8mm、体色は淡黄色。胸部背面は雄成虫で黒色、雌成虫では淡黄色で両側に半月形の黄褐色斑紋を有する。成虫は雄雌とも短翅系がある。）はイネの害虫で、成幼虫が養分を吸汁することにより被害を与えるほか、縞葉枯病や黒条萎縮病といったウイルス病を媒介する。

縞葉枯病は、イネがイネ縞葉枯病ウイルス (*rice stripe tenuivirus*: RSV) に感染することで発生する病害で、ヒメトビウンカによって媒介される。縞葉枯病に感染したイネは、葉に黄緑～黄白色の病斑を生じる。生育の初期に感染すると、葉がこより状になって伸びて垂れ下がる「ゆうれい症状」と呼ばれる病徴を呈し、ひどい場合には枯死する。生育の中～後期に感染すると穂が奇形を呈して出すくみ、また、稔実が悪くなるため減収する。

RSVを保毒したヒメトビウンカが、幼虫の形態で越冬し、翌年の伝染源となる。また、RSVは経卵伝染するため、RSVを保毒したヒメトビウンカから産まれた幼虫は、高率にRSVを保毒する。

2 発生状況

ヒメトビウンカは、春先に麦圃場や雑草地で増殖した第1世代成虫が、麦の刈取りを迎える6月上旬中旬頃から水田に侵入する。夏の間には水田で増殖したのち、9月下旬以降に孵化した幼虫は短日・低温の影響で休眠し、越冬する。

縞葉枯病はヒメトビウンカのRSV保毒虫率が高く、ヒメトビウンカの発生量が多い場合に発生量が多くなる。病害虫防除所では、5月下旬に小麦圃場から採集したヒメトビウンカ幼虫のRSV保毒虫率を検定し、HPにて情報提供している。

※岐阜県病害虫防除所HP 「病害虫情報」

(http://www.pref.gifu.lg.jp/sangyo/nogyo/gifu-clean/24321/index_12141.html)

県平坦地で過半を占める普通期栽培では、縞葉枯病抵抗性品種「ハツシモ岐阜SL」が普及しており、導入以前と比べて縞葉枯病の発生は激減している。しかし、早植えの品種には本病に罹病性の品種が多く、本病の発生が見られるため注意が必要である。

県内で多く作付されている品種のうち、あきたこまち、ひとめぼれ、コシヒカリは本病に罹病性である（※平成28年度岐阜県主要農作物奨励品種特性表より）。

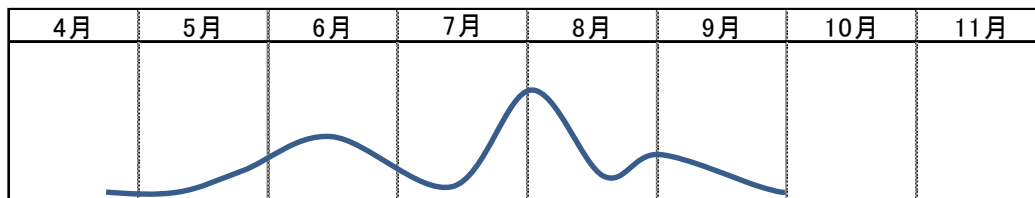


図3 ヒメトビウンカ成虫の発消長

3 防除対策

(1) 薬剤による防除

縞葉枯病はウイルス病であり、感染後に効果のある薬剤は無いため、伝染源であるヒメトビウンカの防除を行う。長期残効性のある箱施薬を実施しない場合は本田への第1世代成虫飛込み最盛期に散布剤による防除を行う。

多発地帯では飛来源となるほ場周辺の雑草管理に努めるとともに、麦の登熟期に第1世代幼虫を対象とした広域一斉防除を行う。

(2) 耕種的防除

秋～冬に水田の耕起を行い、水田雑草でのヒメトビウンカの越冬量を抑える。

(3) 品種・作期

縞葉枯病の激発地帯では、抵抗性品種の作付に切り替える。イネが本田に移植されてから20日前後経過すると、縞葉枯病に対する感受性が高まるため、この時期と第1世代成虫発生最盛期が重なると本病の発生が多くなる。このため、激発地帯では5月中旬～下旬の早植えを避ける。